絶海中津『蕉堅藁』の作品配列について（四）

――五言絶句、七言絶句（九五～一二八）の場合――

朝倉和

はじめに

稿者はこれまで、絶海中津（一三三六～一四〇五）の『蕉堅藁』の五言律詩、七言律詩、一部の七言絶句（八〇～九四）の作品配列について言及して来た。[1] 本稿では、五言絶句と、残りの七言絶句（九五～一二八）の詠作状況を明らかにし、それらの配列順序について考えてみたいと思う。そして、今回で『蕉堅藁』の詩作品をすべて考察したことになるので、今までの成果を踏まえながらそれらを概観し、総括的な意見を述べてみたい。

『蕉堅藁』の引用は『五山文学全集』第二巻、作品番号および詩の総数は蔭木英雄氏『蕉堅藁全注』（清文堂、平一〇）による。返り点は蔭木氏前掲書、入矢義高氏校注『五山文学集』（新日本古典文学大系48、岩波書店、平二）、梶谷宗忍氏『蕉堅藁　年譜』（相国寺、昭五〇）等を参考にして、私に施した。また、『五山文学全集』は『全集』、『五山文学新集』は『新集』と略す。本論に入る前に、もう一度、絶海の生涯のあらましを確認しておく。主な史料は、『仏智広照浄印翊聖国師年譜』（以下、『仏智年譜』と略す）、『勝定国師年譜』（以下、『勝定年譜』と略す）、『蕉堅藁』、『空華日用工夫略集』（以下、『日工集』と略す）である。

○誕生――建武三年（一三三六）十一月十三日　（一歳）
○京都修行期――貞和四年（一三四八）～貞治三年（一三六四）
　（十三歳～二十九歳）
○関東修行期――貞治三年（一三六四）～応安元年（一三六八）
　（二十九歳～三十三歳）
○中国留学期――応安元年（洪武元年、一三六八）～永和三年（洪武十年、一三七七）　（三十三歳～四十二歳）
○九州静養期――永和三年（一三七七）～永和四年（一三七八）
　（四十二歳～四十三歳）
○近江隠遁期――永和四年（一三七八）～康暦元年（一三七九）
　（四十三歳～四十四歳）
○甲斐恵林寺住持期――康暦二年（一三八〇）～永徳二年（一三八二）　（四十五歳～四十七歳）
○関東再遊期――永徳二年（一三八二）～永徳三年（一三八三）
　（四十七歳～四十八歳）
○摂津・讃岐・阿波隠棲期――至徳元年（一三八四）～至徳三年（一三八六）　（四十九歳～五十一歳）
○鞏寺（等持寺・等持院・相国寺）住持期――至徳三年（一三八

六）～応永十二年（一四〇五）　（五十一歳～七十歳）
○示寂――応永十二年（一四〇五）四月五日　（七十歳）

【注】絶海は近江、甲斐、摂津に赴く直前、短期間ながら京都に滞在していた。また、中国に渡る前も、一旦関東から帰洛していたと思われる。

一　九十五番詩および九十六番詩

さて、論の進行上、残った七言絶句から見ていきたい。便宜的に全体を三区分し、考察を加えていく。まず、九十五番詩と九十六番詩の詩題を掲げる。

・「永徳壬戌の春、松間居士の枕流亭の諸作を拝観す。前韻に追和して、楮尾に贅すと云ふ」（九五）
・「明絶侍者の雪中の韻に次す」（九六）

九十五番詩について。「永徳壬戌」とは永徳二年（一三八二）にあたり、この年の春、絶海はすでに恵林寺に住していた（『仏智年譜』）。「松間居士の枕流亭」に関しては、諸書では不明となっているが、天岸慧広（？～一三六二）の『東帰集』（『全集』第一巻所収）に、「松澗居士の枕流亭の韻に次す」詩も見受けられる。天岸もまた、恵林寺に住していた（『東帰集』『夢窓国師語録』等）。

九十六番詩について。「明絶侍者」とは明絶口光のことであり、甲斐で絶海に従事した学徒のうちの一人である。彼に関しては、以前に言及したので、ここでは省略する。

以上のことから、ここに挙げた二首は、絶海が甲斐の恵林寺の住持をしている時に詠まれたものである。

二　九十七番詩～九十九番詩

・「銭原にて清渓和尚の韻に和す」（九七）
・「前韻に和して崇大岳に答ふ」（九八）
・「宝冠精舎にて大亨西堂の訪はるるに次韻す」（九九）

『仏智年譜』によると、絶海は至徳元年（一三八四）六月、足利義満（一三五八～一四〇八）に直言してその意に逆らい、摂津の銭原（大阪府茨木市）に隠棲した。そして、翌二年四月に摂津有馬の羚羊谷（牛隠庵）[2]に移り、七月末には、細川頼之（一三二九～九二）に鄭重に招かれて、讃岐の普済院に住し、ついで阿波の宝冠寺の開山になった。したがって、九十七番詩は摂津での作、九十九番詩は阿波での作である。

九七　銭原和二清渓和尚韻一

世事従来多二変態一。当初早悟有二如今一。青山高臥茅簷下。不レ許白雲知二此心一。

「世事、従来、変態多し」――これは、義満との衝突を背景にしての詠出だろう。「当初、早に悟る、如今有るを」以下の句からは、絶海の宗教家らしい一面が窺われると思う。なお、九十七番詩は、建仁寺両足院蔵『東海璚華集（絶句）』（『新集』第二巻所収）にも採られており、そこでは「答義堂和尚見寄」という詩題になっている。[3]

九十八番詩も摂津での作である。その詠作状況は、序文で詳しく知ることができる。

拙者八月廿六日乗レ涼出遊。州中名山曰二勝尾一。曰二箕面一。曰二神呪一。曰二十輪一。窮レ奇探レ勝興寄浩然。遂詣二西宮之社一。所謂剣珠者。蓋絶世之奇観也。凡経二四日一而帰二銭原之寓所一。乃知高駕来臨等レ余不レ遇而帰也。珙童口二誦見レ留之作一。厥韻琅々然也。於レ是不レ能レ無二社燕秋鴻之歎一。修レ書之次、輒依二芳押一。以答二来意一云。

絶海は、至徳元年の八月二十六日から約四日間、涼しさに誘われて、州中の名山である勝尾寺、箕面寺、神呪寺、鷲林寺に遊んだり、西宮神社に参詣したりした。ところが、あいにくその間に、大岳周崇が絶海の寓居を訪れ、待ちわびて、詩を残して帰って行ったという。絶海は大岳に書簡をしたためるついでに、彼の詩に和韻して、来てくれた友情に答えたのである。

「清渓和尚」とは清渓通徹、「崇大岳」とは大岳周崇、「珙童」とは元璞慧珙、「大亨西堂」とは大亨妙亨のことである。『延宝伝灯録』巻第二十四の[4]「大亨妙亨」の項には、

京兆万寿大亨妙亨禅師。自レ稟二証明一周二旋法席一。（中略）居二土州吸江庵一。元弘（中カ）間武州太守源頼之（細川氏）。以二阿之光勝院一聘招。国務之暇。屢到問レ法。崇信日篤。（下略）

【注】本文には「元弘」とあるが、南朝の元弘年間は一三三一～三三年に当たり、その時期に細川頼之はまだ生まれていないので（元徳元年（一三二九）生まれ）、同じ南朝の年号でも、「元中（一三八四～九一）」の誤りではなかろうか。

という記述があり、大亨が、元中年間に細川頼之に招聘されて、阿波の光勝院（鳴門市大麻町萩原）に住していたことがわかる。四者とも、絶海と同じく、夢窓派である。

三　百番詩～百二十八番詩

・「画鶴」（一〇〇）
・「春夜、月を看る」（一〇一）
・「伏見親王の画軸に題す」（一〇二）
・「帰田の図に題す」（一〇三）
・「相府の深心院殿を悼む雅詠を拝観して、謹んで一絶を呈し奉り、情を詞に見はす」（一〇四）
・「菊苗を移す　琴字を得たり」（一〇五）
・「緑陰　三字分韻」（一〇六）
・「江天暮雪の図に題す」（一〇七）
・「春雨　羊字を得たり」（一〇八）
・「雨後、楼に登る」（一〇九）
・「扇面の画に題す　〔三首〕」（一一〇）
・「察侍者の韻に和す」（一一一）
・「山家　以下五首は相府席上の作なり」（一一二）
・「旧を懐ふ」（一一三）

・「山」（一一四）
・「鐘声近し」（一一五）
・「河上の霧」（一一六）
・「新居に松を植う」（一一七）
・「謹んで相府の鈞旨を奉じて、資寿の無求老兄の戯るる有るに次韻す」（一一八）
・「海図の障子」（一一九）
・「輦寺に花を看る」（一二〇）
・「蕨を採る」（一二一）
・「人日、剣童の韻に和す」（一二二）
・「霑童の韻に和す」（一二三）
・「梅花野処の図に題す」（一二四）
・「盆蘆」（一二五）
・「帥新戒の韻を用いて、儼蔵主の甲に帰りて親を省するを送る。兼ねて邦君の幕下に柬し、以って意を致すと云ふ」（一二六）
・「允修小生の歳旦の韻に次す」（一二七）
・「鵲」（一二八）

先に結論から述べると、ここに挙げた詩はすべて、絶海が晩年、京都で大寺院の住持を勤めていた時に詠まれたものであろう。

前節で述べたように、絶海は一旦義満と対立したが、その真価を理解されるにつれて、義満の信頼を得るようになり、等持寺・等持院・相国寺（三住）と次々に住した。義満に『金剛経』『首楞厳経』『十牛図』の講義をしたこともあるし、彼に従って西国（厳島）に遊んだり、彼の命令で応永の乱の調停に乗り出したこともある。義満の剃髪の戒師を勤めたのも絶海である（『仏智年譜』『勝定年譜』『蔭涼軒日録』『鹿苑院殿厳島詣記』『応永記』『扶桑五山記』等）。したがって、このような晩年の絶海と義満の親密な間柄を勘案すると、百四番詩、百十二～百十六番詩、百十八番詩は、京都での作と見て差し支えないだろう。「深心院殿」とは近衛道嗣、彼が死没したのは至徳四年（一三八七）三月十七日のことなので、百四番詩は、絶海が阿波から帰京して約一年たった後に作られたと推測される。

「無求老兄」とは無求周伸、「資寿（院）」は相国寺の開山塔で、後に崇寿院と改称された（『扶桑五山記』）。『日工集』至徳三年十月廿六日条には、「是の夜、府君（足利義満）・等持絶海（中津）・資寿無求（周伸）洎び余（義堂周信）は、同じく鹿苑の僧堂に帰り、十二の道人に陪して坐禅す」という記述がある。

さて、絶海が輦寺に住したのは、老年期を迎えてからである。彼の身辺には、少年僧（「童行」「新戒」「小生」等）がつどい、住持（絶海）の世話をしたり、修行や勉学に励んでいたことであろう。百二十二、百二十三、百二十六、百二十七番詩は、詩題からこの時期の作品と思われる。特に百二十二番詩の「老懐、芳辰を競ふに意無し。忽ち喜ぶ、剣童の詩句の新なるを」、百二十三番詩の「老懐、案頭の巻を了するに嬾し。愛す、爾が書を攤きて床に満たしむるを解するを」という表現からは、詩作や学問に耽る少年僧をやさしく

見守る老僧絶海の姿を想像することができる。百一番詩や百十三番詩も、「良宵、何ぞ必ずしも衰齢に負かん」や「白頭、簡を授く、華堂の下」という詩句があることから、この時期に詠じられたものであろう。なお、「華屋」という語は、百十九番詩にも「近く華屋に来たりて、居は気を移す」という用例があり、相国寺などの大寺院を指しているのではないだろうか。「劍童」「霑童」「帥新戒」「儼蔵主」「允修小生」は未詳。「邦君」に関しては、蔭木氏は「武田信成か」（一八四頁）と指摘されている。

百十七番詩、百二十番詩について。百十七番詩の「松を栽ゑて為に万年の枝を護る」という詩句は、この詩が万年山相国寺での詠出であることを示していよう。百二十番詩に関しても、詩題に「輦寺」とあり、詩中に「寺は皇居に近くして」とあることから、相国寺で詠じられたものであろう。蘭坡景茝の『雪樵独唱集』絶句ノ一（『新集』第五巻所収）には「和万年旭岑試筆」詩に「寺近皇居気色新」、天隠龍沢の『黙雲藁』（『新集』第五巻所収）には「和万年檀渓韻」詩に「寺近皇居気象饒」という句が見られる。

その他、百二番詩について。本文を挙げる。

一〇二　題二伏見親王画軸一

江天落日弄二新晴一。雪後峰巒万玉清。好在梁園能レ賦客。何時起レ草直二承明一。

島田修二郎、入矢義高氏監修『禅林画賛　中世水墨画を読む』（毎日新聞社、昭六二）には、この詩が記された山水図（作品番号89、伝張遠筆、題詩・絶海中津、十四世紀末―十五世紀初期、紙本墨画、三四・五×九四・九㎝、相国寺）が掲載されている。大西広氏は解説の中で、以下のように説明されている。

○　本図は京都・相国寺に伝来した品であるが、絶海中津（一三三六～一四〇五）が題詩を付したと思われる明徳から応永にかけての時期（一四〇〇年前後）には、皇族の伏見宮家の所蔵であったことが、絶海の詩文集『蕉堅稿』によってわかる。伏見宮といえば誰もがまず思いうかべるのは、有名な『看聞御記』の筆者で書画の収蔵家でもあった後崇光院・伏見宮貞成（一三七二―一四五六）の名であろう。がしかし、ここにいう伏見宮とはその貞成ではなく、彼の父・栄仁親王（一三五一―一四一六）であったろうと思われる。（中略）栄仁は、持明院統の崇光天皇の第一皇子として生まれながら、南北両朝の確執に翻弄され、ついに皇位にはつけず悲運のうちに一生を送った人である。文字どおり子の貞成に受け継がれてゆく風雅の家系を代表する人物でもあり、絶海や空谷明応などをはじめ、五山の文学僧とのあいだにも親交があったことが知られている。

そうした背景から見て、本図で興味ぶかいのは、絶海の題詩に、心なしかその栄仁親王の境涯への個人的な思い入れが籠められているように感じられることである。絵そのものは、雪景山水に行旅の人を点景として添えるといった図柄で、一

般に群峰雪霽図とか関山行旅図などと呼ばれていたものの一類であり、何かここにそれ以上の特殊な主題があるとは考えられない。それに対し詩の方は、絵にとらわれない自由な想像によって、内容として漢の司馬相如の故事をうたいこんだものになっている。むろんこうしたこと自体は題画詩にはよくあることであるが、一般に題画詩にその傾きが強いときには、絵の主題だけでなく、題画の背後情況との関わりを考えてみるべきであろう。（下略）　（二八一頁）

○　このようにさまざまな想像をかきたてる本図であるが、面白いことに絵そのものは日本でかかれたものではない。中国画説あり朝鮮画説あり、その鑑識が歴史上、二転、三転してきたという点でも、本図はじつはたいへん興味ぶかい一作なのである。（下略）　（二八二頁）

この詩群には、画図や扇面に題した、いわゆる題画詩や、題詠詩が多いため、百番詩、百三番詩、百五～百十一番詩、百二十一番詩、百二十四番詩、百二十五番詩、百二十八番詩と、詠作状況が判然としないものも間々あるが、前後の作品が京都で詠まれたものなので、京都での作と考えてよいだろう。「察侍者」とは鑑渓周察のことであろうか。なお、百五番詩は、希世霊彦の『村庵集』（建仁寺両足院蔵。『新集』第二巻所収）にも採られている。両足院本には、他にも絶海の作品が見受けられるが、玉村竹二氏の解題には、多少の疑問が残る。[5]

四　六十九番詩～七十九番詩

最後に五言絶句を見ていく。詩題を掲げる。

・「雲間の口号」（六九）
・「長門の怨」（七〇）
・「鴈」（七一）
・「四皓の図に題す」（七二）
・「西湖帰舟の図」（七三）
・「扇面の画に題す　七首」（七四）
・「扇面の竹」（七五）
・「乾杜多が韻に和す」（七六）
・「梅竹軒　高麗僧に贈る」（七七）
・「画に題す　四首」（七八）
・「玉碗外史の扇に題す」（七九）

どうしてこの詩型を後回しにしたかと言うと、題詠詩や題画詩ばかりで、いずれも詠作状況が判然とせず、僅かな手掛かりと、今までの傾向を参考にして、論を進めなくてはならないからである。

六十九番詩の「雲間」とは現在の上海市松江区、「口号」とは詩題の一つで、文字に書かずに、心に浮かんだ通り吟詠することを言うので、同詩が中国での作ということは、まず動かないだろう。

さて、七十番詩から七十五番詩までは、題詠詩と題画詩が続き、七十六、七十七番詩を置いて、七十九番詩まで、また題画詩が続く。

七十六番詩の本文を挙げる。

七六　和二乾杜多韻一

昌期帝載熙。法運中興時。喜見詩多レ態。晴空百尺絲。

絶海は一方で天皇（後小松天皇か）の治世や、仏教（禅宗）の時勢を賛美し、一方で乾杜多の詩作を喜んで見ている。臨川寺事件を経て、近江や甲斐でしたためた書簡の中には、「邇来、法道古ならず、目を挙ぐれば、悽然たり」（百四十八番書）とか、「某、進みて危機を避けず、退くも亦た高尚の節を失ふ。冥頑無識、宗門を玷汙す」（百五十二番書。「法門を汙辱す」という用例は、『蕉堅藁』に二例ある）と、仏法の現状を危惧したり、仏者としてのおのれの行動を戒めたりしていたが、この詩には、時代の流れ（南北朝合一）や、彼を取り巻く環境の変化（大寺院の住持歴任）を感じる。また、「杜多（頭陀）」とは修行僧のことである。詩作に興じる乾杜多をやさしく見守る絶海の眼差しには、先に見た百二十二番詩や百二十三番詩に通ずるものがある。よって、晩年の京都での作と位置付けてよいのではなかろうか。なお、「乾杜多」に関して、蔭木氏は「春屋妙葩（普明国師）の嗣の用健周乾か」（一三五頁）と指摘しておられる。

高麗僧に贈ったという七十七番詩も、「三年、日域に遊び、高興、帰敗を促す」という詩句があるので、日本（京都）での作と考えてよいだろう。

さて、六十九番詩は中国での作、七十六、七十七番詩は京都での作と特定したが、問題はここからである。今までの傾向を振り返ると、『蕉堅藁』の五言律詩や七言律詩の作品配列は、大体、詠作年代順に整理されていた。このことを、五言絶句にも援用したい。七十番詩の本文を挙げる。

七〇　長門怨

寂寞長門夜。昭陽歌舞来。妾身若二残燭一。涙尽寸心灰。

この詩は、武帝の寵愛を失い、長門宮に退いた陳皇后の悲しみを詠じたものであるが、全くの艶詩である（代表的な詩の総集である以心崇伝（一五六九～一六三三）他編『翰林五鳳集』では、巻第六十二・恋に収録されている）。艶詩は、五山文学史上、室町時代後期の特徴の一つと考えられているが、絶海詩におけるそれは、その濫觴（発芽）と思われる。よって、この詩は、晩年の京都での作ではなかろうか。ちなみに蔭木氏も、つぎのように指摘されている。

筆者は 119 の〃近く華屋に来れば、居は気を移す〃の句の通り、花の御所に近い大伽藍に住持する絶海が、長門宮の悲恋の絵画を見て、時流に抗し得ずして作った五絶であると解するのである。（一二八頁）

七十番詩が京都での作ということになると、それ以降の作品も、七十六、七十七番詩も含めて、絶海が晩年、京都の大寺院に住していた時に詠まれたものということになって来よう。推測の域を出ていないかも知れないが、稿者が現段階で追究できるのは、ここまでである。

「（商山）四皓」とは、秦末に世乱を避けて、商山に隠れた四人の髪眉が白い老人――東園公・夏黄公・甪里先生・綺里季――を指し（『漢書』王貢伝等）、五山禅僧が好んで用いた詩の素材の一つである。『翰林五鳳集』巻第五十九・支那人名部には、「商山四皓図」「扇面四皓」「四皓囲碁図」等の詩が見られる。また、「西湖」の孤山には、北宋の詩人である林和靖（林逋、九六七～一〇二八）が隠れていた。前稿でも触れたように、絶海は実際に和靖の旧宅を訪れており（『勝定年譜』）、七十三番詩を詠出する際には、当時のことを思い起こし、きっと感慨深かったことだろう。なお、和靖も五山禅僧によく詠まれ、『翰林五鳳集』巻第六十一・支那人名部には、「和靖像」「読和靖詩」「和靖放鶴図」「和靖回棹図」等の詩が見られる。「玉畹外史」とは玉畹梵芳のことである。

おわりに

以上、今回は五言絶句（六九～七九）と、一部の七言絶句（九五～一二八）とを見て来た。対象が絶句なので、考察の手掛かりが少なく、解釈の不充分を恐れるが、現在のところ、六十九番詩は中国での作、七十～七十九番詩は京都での作、九十五、九十六番詩は甲斐での作、九十七、九十八番詩は摂津での作、九十九番詩は阿波での作、百～百二十八番詩は京都での作と結論付けるに至った。大方のご批正を乞いたい。

＊　＊

冒頭で述べた通り、『蕉堅藁』の詩作品の配列に関して纏めてみたい。まず、各詩の詠作状況をもう一度、振り返ってみる。

○五言律詩他（一～二二。計三〇首、他作四首を含む）
- 一～十三番詩…中国での作
- 十四番詩…九州での作
- 十五番詩…九州か、近江か、甲斐での作
- 十六～十九番詩…甲斐での作
- 二十～二十二番詩…京都での作

○七言律詩（二三～六八。計六七首）
- 二十三～四十六番詩…中国での作
- 四十七～五十二番詩…九州での作
- 五十三番詩…宇治（近江に向かう途中）での作
- 五十四～五十九番詩…京都での作
- 六十～六十八番詩…関東での作

○五言絶句（六九～七九。計二〇首）
- 六十九番詩…中国での作
- 七十～七十九番詩…京都での作

○七言絶句（八〇～一二八。計五五首、他作三首を含む）
- 八十番詩、八十番詩A…中国での作
- 八十番詩B、C…京都（相国寺）での作

・八十一～八十五番詩…中国での作
・八十六番詩…宇治（近江に向かう途中）での作
・八十七～九十四番詩…京都（天龍寺）での作
・九十五、九十六番詩…甲斐での作
・九十七、九十八番詩…摂津での作
・九十九番詩…阿波での作
・百～百二十八番詩…京都での作

上記の如く、『蕉堅藁』の詩作品の配列は、その種類ごとに、大体、詠作年代順に整理されていた（ただし、中国での作や京都での作など、それぞれの詩群の中での配列は、必ずしも年代順にはなっていない。例えば、各詩型の巻頭詩には、絶海の自信作や、思い入れのある作品が採られている。一番詩は、「流水、寒山の道、深雲、古寺の鐘」という詩句が人口に膾炙していたし、二十三番詩は、中国で師事した季潭宗泐（全室和尚、一三一八～九一）に次韻したものである。八十番詩は、明の太祖高皇帝（洪武帝・朱元璋。一三二八～九八）と唱和したもので、これに関連したエピソードは広く流布していた。横川景三編『百人一首』の巻頭詩でもある）。が、一部に順序の乱れも認められる。例えば、その顕著なものとして、六十～六十八番詩が挙げられる。これらの詩は、絶海が関東に再遊した時に詠まれたもので、京都での作（五四～五九）との間に、詠作時期が前後する作品があるのである（七言律詩は、詠作場所別に見ると、整理されている）。また、八十番詩B、Cは、中国僧の天倫道彝らが後年、機会を別にして八十番詩に和したものである。基本的に各作品が年代順に配列される『蕉堅藁』において、両詩がここに位置しているということは、作者の絶海（もしくは編者の鄂隠慧戮）が、その詠作状況を考慮して、確固たる配列意識（意図）を有していたことを示す一証左となるだろう。六十～六十八番詩にも、絶海（もしくは鄂隠）の意識（意図）が作用していたかと思われるが、現段階では判然としない。

さて、五山（禅林）詩は、室町時代中期以降になると、七言絶句が目立ってくる。玉村氏は、『五山文学』（日本歴史新書、至文堂、昭四一）の「第八章　五山文学の変質と衰頽」において、つぎのように述べておられる。

嘗ては賦・離騒より古詩・七言五言の律詩・七言五言の絶句というようにあらゆる詩形に亘っていたものが、次第にその種類を減じて行った。しかし絶海・義堂の頃は、まだ律詩が多く作られ、五言詩も多かった。それがこの時代になると、律詩さえも数が少くなり、専ら絶句である。それも五言は影を潜め、七言絶句が、最も一般化して、圧倒的な数に上ってしまった。横川景三が撰んだ『百人一首』や、文挙契選[6]の撰んだ『花上集』（花という字の上の方即「廿」は「廿」で、二十人集ということを表わす）も皆七言絶句のみをとっている。いずれも文明前後の成立をもつ書であるから、如何に室町時

代中期には、既に表現形式が減少し、単一化されてしまったかを知る事が出来る。（後略）　（二七三～四頁）

『蕉堅藁』の詩の総数は、一七二首（他作七首を含む）である。確かに玉村氏のご指摘の如く、『蕉堅藁』において、律詩の総数（九七首、他作四首を含む）は、その半数以上を占める。ただし、詠作時期別に見てみると、律詩が、中国での作が六〇首（他作四首を含む）、京都での作（晩年）が九首と減少しているのに対して、絶句は、中国での作が七首（他作一首を含む）、京都での作（晩年）が三一首と増加している。さすがの絶海も、時代の趨勢には逆らえなかったのであろうか。なお、『中華若木詩抄』にも、中国の詩人と、日本の五山詩僧の七言絶句ばかり、交互に二百六十首収められている。

次回からは、『蕉堅藁』の疏や書簡の作品配列を見ていくつもりである。詩作品を考察するだけでは気付き得ない絶海（もしくは鄂隠）の配列意識が、新たに明らかになることが期待される。

〔注〕

（1）拙稿「絶海中津『蕉堅藁』の作品配列について（一）――五言律詩の場合――」（『古代中世国文学』第十五号所収）、「同（二）――七言律詩の場合――」（同第十六号所収）、「同（三）――七言絶句（八〇～九四）の場合――」（同第十七号所収）。

（2）太白真玄の『峨眉鵜臭集』には、「遊鎌倉溪牛隠寺序」という文章があり、当時の牛隠庵の様子を窺い知ることができる。

庚午春。余治脚疾於摂之温泉。居無何。疾有間。偶携二三友生。游山西鎌倉之溪。路径村居。行無十里之遠。而至其境。乃崇山複嶺。仙岩斗起。青松夾径。白石囲流。漸過独木橋。而闖牛隠之門。珍不名花。繡于面背。絵于左右。宛如遊神仙佳境。風骨冷然。不覚疾之在脚。不亦一奇哉。（下略）

（『全集』第三巻）

（3）両足院本には、作者惟肖得巌の先輩にあたる五山文学僧――義堂周信・絶海中津・無求周伸・雲渓支山等の七言絶句が百七首挙げられており、玉村氏は「義堂・絶海等の詩は、作品がいずれも惟肖に関係の深い人のものばかりであるから、惟肖が先輩の作品を勉学のために抜萃して座右に備えたものと考えられないこともない」（「解題」）と指摘されている。

（4）引用は『大日本仏教全書』第六十九巻・史伝部八による。なお、（　）内は割注を示す。

（5）『新集』第二巻・「希世霊彦集」の編集方針は、内閣文庫蔵『村庵藁』を底本として全文掲載し、その末尾に「希世霊彦作品拾遺」として、他の校訂本に見える逸文を収集している。

さて、『蕉堅藁』の百五番詩以外にも、八十九番詩と九十二番詩が、両足院蔵『村庵集』から「拾遺」に収められている。おそらく玉村氏は、絶海の作と気付かれていなかったと思われる。両足院蔵『村庵集』の解題から抜粋する。

この本は、表紙裏の注記に「卍元老僧手書村庵集壹册乃歸寂之日所遺寄也、」とあるにより、『延宝伝灯録』『本朝高僧伝』の著者美濃盛徳寺の卍元師蛮の自筆書写にかかるものであることを知る。七言絶句二百六十五首、七言律詩二十八首を収めた後、心田清播の作品『心田詩藁』の一部が攙入している。即ち「愛晩菊寄故人」から「贈無文章侍者」「賦海棠寄西山故人」「梅先生詩」「立秋書懐」の六首(玉カ)が七言律詩、「寄北隣梅丈人」「伝日棠棣廃則兄弟歇、伐木廃則朋友缺」云々の題のある詩の二首が五言律詩で、合計八首(七カ)ある。しかるのち、再び希世の作に戻り、五言絶句八十一首を収めて終っている。この本の内容は別に『村庵藁』を上廻る佚文などはない。ただ局部的にはその誤字を訂すべきものはある。ただ卍元手写という点に興味がある。

（下略）　（一二六四～五頁）

結論から言うと、この記述にも誤りがある。玉村氏は、心田の作品の混入を指摘されているが、「贈無文章侍者」詩と「賦海棠寄西山故人」詩に限っては、絶海の作である（本文は確認済み）。『蕉堅藁』の五十六番詩と五十四番詩に当たる。残りの詩は心田の作品で、いずれも『心田詩藁』（『新集』別巻一所収）に確認することができる。なお、両足院本に絶海や心田の作品が混入した経緯に関しては、今後、追究してみたい。

（6）今泉淑夫氏は、「僧某が建仁寺の少年僧文挙契選のために編んだ」とし、「通説でこの集が文挙自身の編とするのは一考を要する」とされている。「『花上集』について」（『東京大学史料編纂所報』第十八号、昭五八）参照。

〔付記〕稿者は最近、相次いで、お二方から刺激的な注釈や書簡を送って戴いた。お一人は、福岡国際大学の兪慰慈氏。氏からは、玉稿「日中文化交流史的基礎研究　《扶桑五山文学原典箋注係列》第一種――絶海中津《蕉堅藁》箋注（Ⅰ）～「同（Ⅳ）」（『福岡国際大学紀要』第一～四号、平一一・三～平一二・七）を賜ったのだが、稿者は未見で、色々と勉強させていただいた。同論文は全文中国語で、各詩が「留（在）明之作」か「帰国後之作」か、判別されており、所によっては稿者との意見の相違も認められるのだが、残念ながらその根拠までは記されていない。今回の考察範囲に限ると、七十～七十五番詩が「留明之作」となっている。確かにこれらの詩の中には、中国の地名も出てくるが、このことは、「留明之作」の根拠にはならないだろう。と、いうのも、各詩とも題詠詩や題画詩で、その地名は、詩材に伴って詠まれたと思われるからである。例えば、「鴈」詩（七一）には「玉塞」（西域地方と内地との境に設けた関門。玉門関。甘粛省酒泉地区敦煌市の西にある）が出てくるが、勿論、絶海が実際に当地を訪れたはずはないし（絶海の主な活動範囲は、江蘇省と浙江省）、『全唐詩』などを見ても、「鴈」と「玉塞」

をともに詠み込んだ詩を、何例か確認することができる（李嶠・「奉和幸望春宮送朔方総管張仁亶」詩、楊衡・「征人（一作思帰）」詩、翁綬・「関山月」詩等）。稿者は、艶詩や絶句が、五山文学史上、室町時代中期以降に流行したことに鑑みても、その影響が『蕉堅藁』にも見られると思うので、七十～七十五番詩は、やはり絶海が晩年、京都で詠んだと考えたい。

もうお一人は、早稲田大学大学院生の野川博之氏。氏からは、『新編鎌倉志』巻之八（大日本地誌大系二十一）の「太寧寺（横浜市金沢区片吹町）」の項に、絶海作として「題太寧寺六首」という詩が掲載されていることをお教え頂いた。詳細な検討はこれからであるが、同詩が後人の偽作などではなく、絶海本人の作ならば、詩中に「老矣」「老来」「白頭」という語があるので、絶海が関東に再遊したことを裏付ける有力な史料の一つになるだろう（「はじめに」の絶海の生涯のあらまし参照）。

※　人物考証に関しては、玉村竹二氏の『五山禅僧伝記集成』（講談社、昭五八）や『五山禅林宗派図』（思文閣出版、昭六〇）を参考にした。禅僧の名前は、道号（字）二字と法諱二字から成り、どちらか一方が明らかならば、その禅僧の素性を知ることは、割と簡単である。しかし、法諱の下一文字しか明らかになっていない場合は、その禅僧を特定することは、かなり難しい。

――あさくら・ひとし、広島大学大学院博士課程後期在学――